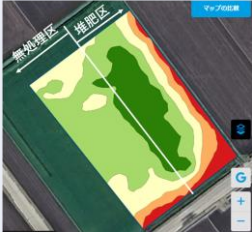


No.3堆肥の活用と施肥方法の改善による麦類の品質・収量の向上

- 活動期間 令和5年度～令和7年度
- 対象者名 涌谷町麦類生産者 14経営体
- 課題の背景
 - 涌谷町では、14経営体が163ha(令和6年産)の麦作に取り組んでいる麦産地である。近年、周辺町域に比べ低収の年が出てきている。
 - 町内産堆肥のストックヤード2か所が稼働し、より一層の堆肥活用に向けて、麦大豆作付け体系のなかで無理なく麦作に活用できる散布方法が求められている。
 - 「夏黄金」に「シラネコムギ」の一括追肥方法を流用し追肥しているが、遅れ穂の発生が多く、出穂後の肥料要求量の多い「夏黄金」に適していない可能性がある。

令和6年度

目 標	活動事項	普及活動のポイント
◆土づくりの重要性に対する理解が進み、町内産堆肥の有効活用が図られる。 	◆堆肥の有効活用支援 堆肥散布試験 	■ 昨年に続き、麦生育中の3月に堆肥を施用する試験を行った。散布1年目のほ場では効果に差があったが、2年連用したほ場では堆肥区の収量が約30%良く、特に4月以降の肥効に差があったと思われる。 ■ 現地検討会ではほ場を巡回、講習会にて調査結果を伝達する中で早春堆肥施用の取り組みが浸透し、令和7年産作では3生産者が取組の意向。令和6年産に大面積で早春堆肥散布に取り組んだ1生産者は、町内で最も高い平均反収を示した。作付前施用を含めると、5生産者が麦作に堆肥活用した。 ■ 堆肥散布ほ場の後作の大豆の生育への効果や土壌物理性などの土改善効果については判然とせず、連年の施用が必要と考えられた。
◆効果的な施肥方法に対する理解が進み、取組者が増加する。 	◆麦類の品質・収量の向上支援 - 葉面散布試験 - 圃場巡回、栽培指導	■ 従来の減分期一括追肥（減分期N10kg/10a）にかえて穂揃期葉面散布追肥を試験した。減分期N3kg/10a＋穂揃期N5kg/10aの追肥で慣行以上の収量、品質を確保でき、肥料代の節減にもつながると考えられた。一方で葉面散布作業の適期の短さや田植時期と重なる点が普及における課題である。 ■ 遅れ穂の発生要因として幼穂形成期の茎数（最高茎数）の影響が大きいことが分かり、茎数確保のためには早まき、春先の追肥（株直し）による茎数確保が重要と考えられ、講習会や巡回を通じて周知した。 ■ R6年の涌谷町の麦反収は494kg/10aであり、管内平均の425kg/10aを上回った。

意図する対象の変化（最終年度）

- 土づくりの重要性に対する理解が進み、町内産堆肥の有効活用が図られる。
- 効果的な施肥方法に対する理解が進み、取組者が増加する。

数値目標：堆肥散布実施者数

令和4年度 0経営体→5年度 1経営体（実績3）→6年度 3経営体（実績5）
（→7年度 6経営体）